学会ニュース　No.156

2026 年 10 月 31 日　全日本博物館学会事務局
〒 150-8440　東京都渋谷区東 4-10-28
國學院大學博物館学研究室内
Tel：03-5466-0268　E-mail：jimu(a)museology.jp

＊＊＊ 目次 ＊＊＊

2026年度第52回研究大会開催後
アンケート結果報告……1
国際会議参加報告「国際海洋リテラシー・ブルーシチズンシップ シンポジウム 2026」in 台湾……3
やっぱりゾウが好き？…いや、キリンも好きです
『キリンが来た道　麒麟児 長次郎の歩み』寸評……4
昭和初期のキリンと上野動物園に関する資料紹介……6
2026年度全日本博物館学会特別賞の授与について……7
【会告】全日本博物館学会選挙管理委員の公募について……7
委員会議事抄録……8
会員情報……8

2026 年度第 52 回研究大会開催後 アンケート結果報告

第 52 回研究大会の開催後アンケート結果をご報告いたします。アンケートにご協力いただいた皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

1．アンケート実施方法

実施期間と方法　学会事務局からe-mailにて、学会員及び大会に参加した非会員へアンケートフォームのURLを送信した。初回送信は7月16日、e-mail件名は「全日本博物館学会 第52回研究大会開催後アンケートのお願いについて」であり、2回目の送信は7月28日、e-mail件名は「全日本博物館学会 第52回研究大会開催後アンケートのお願いについて（リマインド）」であった。実施期間は7月16日～7月31日の、計16日間であった。
対象者　学会員及び今大会に参加した非会員

2．結果

52 名から回答を得た。設問の順に、以下に報告する。

（1）研究大会への参加形態をおしえてください。

	人数（人）	割合（%）
対面で参加した	**35**	**72.9**
対面とオンラインの両方で参加した	2	4.2
オンラインで参加した	11	22.9

（2）全日本博物館学会の会員ですか？

	人数（人）	割合（%）
はい	**48**	**100**
いいえ	0	0

（3）研究大会の満足度はいかがでしたか。以下のうち、1つを選択してください。

	人数（人）	割合（%）
非常に満足した　評価　5	16	33.3
評価　4	**25**	**52.1**
評価　3	5	10.4
評価　2	1	2.1
まったく満足しなかった 評価　1	1	2.1

よろしければ、そのように思う理由をおしえてください。（自由記述）

〔対面参加者〕：■「5」選択者の回答　多岐に及ぶテーマについて真摯な議論がなされていて、いずれも大変興味深い発表だった、懇親会においても様々な研究者の方々とお話しできて有意義な時間を過ごせた、発表者の内容も充実していて参加者からの意見交換も活発に行われて有意義だった、初めての参加だったので今まで全く知らなかった分野を含む様々なテーマの研究発表を聞くことができて良かったといった記述があった。

■「4」選択者の回答　口頭発表もよかったがポスター発表をゆっくり聞けたのはありがたい、発表者の方ともたくさん話せたのが良かった、研究発表の間に休憩が入ったのが良かった、可能であれば質問の時間をもう少しとってほしいといった記述があった。

■「3」「2」「1」選択者の回答　ほぼいつも通りだった（「3」選択者）、大変な運営をよくこなしていたと思う（「1」選択者）といった記述があった。（「2」選択者の自由記述回答はなかった。）

〔オンライン参加者〕：リモートでの参加環境も良かった（「5」選択者）、顔が見えないためフロアーからのご質問の意図やニュアンスが伝わりにくかったように思う（「4」選択者）、音声も画面もクリアで特にストレスなく聴講することができた（「4」選択者）といった記述があったほか、発表内容についての記述があった（「2」選択者）。

（4）また研究大会に参加したいですか？　以下のうち、1つを選択してください。

	人数（人）	割合（%）
ぜひ参加したい　評価　5	**32**	**66.7**
評価　4	11	22.9
評価　3	4	8.3
評価　2	0	0.0
参加したくない　評価　1	1	2.1

よろしければ、そのように思う理由をおしえてください。（自由記述）

様々な研究発表を聞けるから：12 件、情報交換・交流できるから：6 件、発表の機会を得られるから：2 件、そのほかに、若い方たちとのギャップが面白いから、年中行事としてといった記述があった。

オンライン参加者からは、オンラインでも参加できるようになったためハードルが下がり以前より参加しやすくなった、できれば現地参加したいが翌週に全科協総会や日博協参与会、全国博物館長会議と出張するため 2 週にわたっての出張は難しいといった記述があった。

（5）会場参加のかたに、ポスター発表についてお聞きします。以下のうち、1つを選択してください。

	人数（人）
ほぼすべてのポスターを見た	**21**
半分くらいのポスターを見た	11
数枚のポスターを見た	4
まったく見なかった	3
無回答 ※	9 ※

※（5）は会場参加者への設問のため、（1）設問でオンライン参加と回答した11名のうち9名が「無回答」の可能性が高い。

（6）ポスター発表についてお気づきの点がございましたら自由にお書きください。（自由記述）

時間配分がよかった、前半・後半に分けて質疑の時間を設けたのがよかった、発表者と身近に話せる環境でよかったといった記述が複数あった。

今後の要望も複数寄せられた。リモート参加者のために事前録画したポスターの説明を配信できないか、ポスターの情報もデジタル化してネットで公開してほしい、オンライン参加者はポスター発表時間に参加できず残念で、人が集まっていない時間帯にポスターを少しずつ映してもらえば有難いといった要望があった。そのほかに、ポスターフラッシュがあるといいのではないか、ポスターのフォントサイズをある程度以上に規定してもいいのではないか、時間内に 2 回ぐらい発表時間をとって発表してもらえるとよい、ポスター発表者であったが掲示は発表者自身がすればよい（現在の方法は開催者側の負担が大きいので）といった記載があった。

（7）そのほか、時間設定や会場設営、運営面含めましてお気づきの点がございましたら自由にお書きください。

具体的な提案等の記述が複数あった。座長はすぐに会場からの質問を受け付けるようにすべき：3 件、発表者のスライドファイル提出の方法を明確化してほしい（事務局からは事前にパワーポイントファイルという指定があったが、実際には異なる形式での発表もあったため、円滑な運営・進行の妨げになっていたのではないか）：3 件、学会賞受賞者の著書が会場のどこかで手にとれるとよい:1 件、2 日間の大会の中にシンポジウム（フォーラムなどでも）があるとよい、口頭発表はざっくりとしたテーマで分けて 2 会場にすると発表枠も増えてよい：1 件、地方 / 東京の隔年開催を希望する：1 件、研究会の終了は 18 時より早めてはどうか：1 件。オンライン参加については、総会もオンライン参加できるようにしてはどうか：1 件、ポスター発表も何らかの形でオンライン視聴できるとよい:1 件、（オンライン発表者は）チャイムが聞こえにくかったのでストップウォッチがあるとよい：1 件。

そのほかには、会場とオンラインの併用は大変だろうが参加しやすい、今回のエントリーシートは成功だと思うといった記述があった。

3．アンケート結果を受けて（委員会から）

誌面では紹介しきれませんでしたが、円滑に効率よく運営されていたといった感想が複数寄せられたほか、進行がやわらかで安心して参加できたという感想もありました。また、オンライン参加者からは通信環境がよかった、音声も画面もクリアだったという感想が寄せられ安堵しました。具体的なご提案などご指摘いただいた面につきましては、次回の研究大会に向けて検討してまいります。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

（全日本博物館学会委員会）

国際会議参加報告「国際海洋リテラシー・ブルーシチズンシップ シンポジウム 2026」in 台湾

1．シンポジウムの概要

2026 年 9 月 22 日から 24 日の 3 日間、台湾本島の南西海上、台湾海峡にある澎湖島において、台湾国家海洋研究院（National Academy of Marine Research：NAMR）が主催する「国際海洋リテラシー・ブルーシチズンシップ シンポジウム 2026（The International Symposium on Ocean Literacy for Blue Citizens 2026）」が開催された。

本シンポジウムでは、海洋リテラシー、海洋教育、持続可能な海洋ガバナンス、ブルーシチズンシップ（海洋市民性）の分野に携わる政策立案者や研究者、教育者、国際機関、実務者などが、アジア・欧州・北米・オセアニア等の国々から集い、対話と協働の国際的なプラットフォームとなることを目的とした。約 200 人の会場参加者や 10 名の講演者は、互いに知識・研究成果・実践経験を共有し、海洋リテラシーを強化し人と海の持続可能な関係を育む革新的なアプローチを探求した。

2．講演と発表

プログラムの最初の基調講演では、Rebecca Jane Lent 氏から「海洋リテラシーを通じた健全な海洋の確保～海洋資源の資産管理運用から得られた教訓」と題し、海洋リテラシーの普及と関与の拡大は、持続可能な漁業や健全な海の維持において極めて重要であること。漁業の歴史や政策の課題から学んだ教訓として「制限や禁止以外の対策」「ステークホルダーの参加によるデータ収集や権利ベースの管理手法への参加」により健全な海と



プログラム初日の登壇者の記念写真

いう目標を達成できると述べられた。

日本からの招待演者は、本稿の筆者の高田浩二（海と博物館研究所）と一般社団法人インタープリテーション・ジャパン代表理事の古瀬浩史氏の 2 名であった。古瀬氏は「海洋リテラシーを向上させるための教材開発：ラボ・トゥ・クラス（Lab to Class）」の紹介を、また高田からは「社会教育機関と連携して開発した地域の教育資源を活用する海洋教育」という演題で発表した。

高田の発表の趣旨は、日本の水族館や博物館には、環境教育や海洋教育の推進（地球温暖化、海洋ごみ、マイクロプラスチック、SDGs、ESD など、現代社会が直面する多様な課題）に重要な役割が期待され、2007 年に公布された「海洋基本法」では、海洋に関する科学的知識の向上の必要性が指摘されるなど、これまで「海洋リテラシー」には科学的な理解の側面が大きいと述べた。一方で、高田は海洋教育の定義を再検討し、それを単なる「海について学ぶ教育」ではなく、「海の持つ価値や機能を活用した多様な学びの実践」と捉え直し、海洋教育を「海の力を借りたすべての学び」として再構築することを提案した。併せて、地域に存在する多様な教育資源を活用し、幅広い年齢層を対象とした海洋教育活動の具体的な実践事例を紹介し、それらの考え方を「高田メソッド」として提言した。

日本以外の各国（韓国、インドネシア、米国、台湾）からの報告は、いずれも海洋リテラシーを科学的な学びを前提とした教材やプログラムの開発、実践、博物館での展示や教育普及活動の紹介であった。

3．成果と課題

昨今の地球温暖化などの気候変動、海ごみ問題、漁業資源の枯渇などは、国境を超えた世界共通の課題であり、その課題解決のために、海洋リテラシーという言葉の浸透と地域ごとに多様な活動が実践され、また情報の共有、国際連携が大切であることが周知された。

その一方で、それらの活動資金の確保、人材の育成、プログラムの評価手法などが不十分で、持続可能な仕組みづくりが急務であり、それらの課題解決の議論もなされた。その中で、前述した「高田メソッド」が会場全体で一定の共感を呼び「新しい海洋教育の概念だ」と議論の中でも引用されるなど、参加者の一人としてありがたい成果であった。本メソッドのさらなる浸透を願っている。

（高田浩二　海と博物館研究所）

やっぱりゾウが好き？…いや、キリンも好きです
『キリンが来た道　麒麟児 長次郎の歩み』寸評

1．面白かった“ゾウの展示”

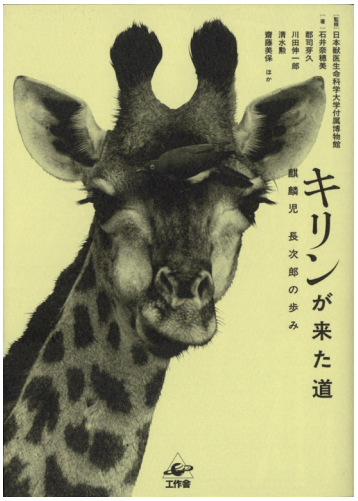
2026 年春から夏にかけて、ゾウに関する実に面白い企画展が開催された。髙島屋史料館 TOKYO の『やっぱりゾウが好き―デパートの屋上にゾウがいた！』（3 月 13 日～ 8 月 31 日）である。日本橋高島屋の屋上で 1950 年から 54 年まで、ゾウの“たかちゃん”が飼育されていて、子どもたちを背に乗せるなどで喜ばせていた。そのたかちゃんの記録を見せてくれるとともに、日本におけるヒトとゾウの関わりの歴史について解き明かす展示だった。監修は木下直之氏。なるほど、面白いわけだ、と簡単に言ってしまうのでは申し訳ないと思いつつ、それが率直な感想だった。また、企画展終盤になり、その図録と言える木下氏の著書『ゾウに乗る―見世物・サーカス・動物園』が刊行された（2026 年 7 月 30 日、東京大学出版会）。それもまた実に面白く、そして博物館学（動物園学）史の中に確実に印される一書だと思ったのである。

2．“キリンの展示”も負けてはいない

しかし今回の主役はなんと言っても“キリン”である。ゾウがたかちゃんなら、こっちは長次郎だ。

長次郎は、日本獣医生命科学大学付属博物館に“いた”骨格標本のキリンの名前である。と言っても、その骨格標本の主が長次郎と判明するまで、それなりに時間がかかっている。その経過などをもとに同館で企画展『キリンが来た道　麒麟児 長次郎の歩み』が開催されたのが、2023 年 11 月 3 日から翌年 6 月 21 日だった。そしてそのタイトルがそのまま使用され、書籍となって手元に置くことができるようになったのだ。

さて、同館に“いた”と言ったが、事実上はまだ“いる”。どういうことかというと、同館の建物（「旧東京市麻布区役所庁舎（日本獣医生命科学大学一号棟）」の名称で国の登録有形文化財（建造物）として指定）の 2 階に、以前は組み上がった標本として長らくその姿を見せていたのだ。しかし、標本自体の劣化の進行や倒壊の危険性を考慮して 2025 年 1 月 21 日に解体され、現在、通常の見学が叶わなくなっている。つまり、館内にはいるのだが、今は見ることがなかなか叶わないのだ。ということから、つい過去形を使ってしまった。ちょっとややこしい表現となったが、ご理解賜りたい。



キリンが来た道　麒麟児 長次郎の歩み』表紙

3．謎解きの経過を企画展に、そして書籍化

さて、そのキリンの骨格標本の主が長次郎であると突き止め、その生涯を解き明かす作業（文献、絵葉書といった写真等さまざまな資料の分析、検討など）は、まさに博物館における調査研究であり、その成果を展示という形で発信する、それこそ博物館ならではの姿と見た。しかしそれを“研究”という言葉でお堅く言ってしまうのは実に惜しいし、だからこそ敢えて“謎解き”と言いたくなるのだ。

その中心的な役割を果たした石井奈穂美氏の、目の前にあるキリンの素性を知りたいという素朴な疑問に始まり、そこに当時・大学院生の鈴木遼太郎氏の見つけた情報も加わって、その正体が明らかになっていくその過程は、見ていて、読んでいてワクワクするし、実に楽しいものだった。

まず、いきなり謎解きではなく、日本の動物園におけるキリンの歴史、即ち上野動物園における最初のキリンの導入（明治 40 年＝ 1907 年）の話からだ。博物館学、そして動物園関係者ならば多くが知っていると思う、石川千代松の話である。かように日本のキリン史を丁寧に説明していく。そして、その後の導入の話になるのだが、長次郎の親である長太郎、高子の 2 頭の来歴、そしてその夫婦から生まれた麒麟児たちを説明していく。井の頭自然文化園への引っ越し事情や、資料に写るキリンの様子も丁寧に読み解いていた。

そして、当の骨格標本が、長太郎と高子の次男、長次郎であると突き止めるのだが、解明に至るまでの関係資料とともに見せてくれ、多くの関係者の尽力のもと、長次郎の亡骸が骨格標本となり遺ってくれたことを理解できたのだ。さらにキリンの骨格の説明なども加わりながら、日本のキリンとヒトとの関係史の一端を見事に知らしめてくれるものとなっていたのだ。

展示資料では、例えば上野動物園の『動物園グラフ』は、表紙にキリンが採用されるなどさまざまな版の存在を筆者自身知っているものの、「あっ、この版は見たことがない（持ってない！）」とか、この資料が手に入らないかネットで調べてみようとか（実際いくつか入手）、昔の動物園資料の蒐集も怠らない筆者の資料への欲望を掻き立ててくれたのも、何とも言えず楽しかった。

ところで筆者が企画展を拝見したのは、2024 年 5 月 29 日だった。実は、当初の終了予定が 5 月 31 日だったので、その 2 日前の滑り込みとなった。しかし会期が 6 月 21 日まで延長されたことを知り、嬉しくなった。と言うのも、筆者は博物館学課程の授業の際、冒頭で最近見た展示だとかお勧めの博物館を紹介することを常としているのだが、終了間際の展示だとなかなか紹介しづらい時もある。しかし会期が延長されたことで学生に周知できたことも嬉しかった。良い展示というのは一人でも多く訪れてほしいものなのだ。

かくして、実に楽しい企画展が幕を閉じ、そして長次郎は解体されていくこととなる。

さて、長次郎の骨格標本が解体された後、今度はミニ展示『長次郎の再出発』が 2025 年 6 月から 2026 年 6 月までの約 1 年間、同館で開催された。ミニ展示では、解体されたからこそ長次郎の頭蓋骨を間近に見ることができるというオマケも付いた。組み上がった標本だと、頭蓋骨は見上げるしかないからだ。

筆者が所属する大学は人文系の博物館学を主に対象としているのだが、ミニ展示が公開されたことを受け、解体した骨格標本の今後の保存についてなど学ぶことを目的に大学院の博物館学コースで同館を訪れ、現状を理解するとともに、自然史資料の保存継承について学ぶこともできた[(1)]。

企画展、そして続くミニ展示も取り敢えず終わってしまった。しかし、同タイトルで書籍として残ったのがなんとも嬉しい。“謎解き”のワクワクをいつでも読んで感じられるからであり、このように記録として遺してくれたことにも感謝したい。

4．好きなのはどっちだ？

いかがだろうか。キリンの展示（謎解き）もなかなか面白く、そして動物園や博物館でキリン（またはその剝製）を見る目も自然と変わっている自分に気づく。昭和 8 年のハーゲンベック・サーカスで来日したキリンのペアが長太郎・高子となるわけだが、絵葉書などに遺っているのがその後の長太郎なのか高子なのか、それも気になってくる。また、岡山県立美術館にて今夏開催された特別展『サーカス！～ようこそ夢の世界へ～』（2026 年 8 月 1 日～ 9 月 23 日）では、古賀春江がハーゲンベック・サーカスを「サーカスの景」として描いた作品が展示されており（古賀の絶筆というのはあとで知った）、その中にキリンが描かれているのも感慨深く見ることができた。『キリンが来た道』は、キリンに対する目を開かせてくれた展示であり、書籍だったのだ。

さて、冒頭にゾウに登場してもらったが、ほかにも多くの動物たちが同様に展示として取り上げられ、“好き！”と言われるその時を待っているかもしれない。今や日本にはいなくなったパンダ、また、その姿を水族館で見ることが叶わなくなりそうなラッコ。そういった花形だけではない。あくまで筆者の主観だがカヤネズミなども可愛いではないか。

しかし、今は単純な問いに戻してみよう。

ゾウが好き？キリンが好き？

どっちが好き？

いやいや、やっぱりゾウもキリンも好きなのだ。

そして、他の動物のこういった“面白い”展示に今後も出会えることを期待してやまないのである。さらにそれが書籍として後々まで遺ることも期待するのである。その意味で、キリンの長次郎、そして学芸員・石井奈穂美氏は、良い仕事を遺してくれたと言いたいのだ。

ありがとう、長次郎。また逢う日まで。

【書誌情報】

『キリンが来た道　麒麟児 長次郎の歩み』
2026 年 3 月 31 日
監修：日本獣医生命科学大学付属博物館
著者：石井奈穂美、羽山伸一、郡司芽久、川田伸一郎、清水 勲、斎藤美保、鈴木遼太郎、鏡 晃
発行：工作舎
ISBN：978-4-909064-58-5
定価：本体 2,000 円＋税

註

(1) 見学を受け、大学院生が書いたレビューを『Musette―國學院大學博物館學研究』第 5 号（2026 年 3 月 31 日、國學院大學博物館学研究室発行）に掲載している。同時に石井奈穂美氏からコメントをいただいた。
糸数琹菜「【見学レポート】日本獣医生命科学大学付属博物館「長次郎の再出発」『キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～』出版記念ミニ展示を見て」
石井奈穂美「見学レポートを受けて」

（山本哲也　國學院大學）

昭和初期のキリンと上野動物園に関する資料紹介

日本獣医生命科学大学付属博物館（以下、日獣大博）に遺っているキリンの骨格標本・長次郎は、上野動物園で生まれ、後に井の頭自然文化園に移り、4年間という短い人生を終えた後に同大に遺されたものだ。その両親のキリン夫婦に関する資料として、ほとんど目に触れる機会がないと思われる資料を以前入手した。『時事新報』昭和8年10月9日の夕刊である。

1面全面を使って2頭のキリンとそれを見守る子どもたちが描かれている（図1）。『上野動物園百年史』（東京都恩賜上野動物園編 1982）によれば、命名式は9月23日とのことである。日獣大博の企画展で見た命名式の様子を写した絵葉書では、柵内で大人たちとともにキリンに近づく子どもたちがいる。見た目に柵内での様子のように描かれており、それが命名式の様子なのか、または命名式後のやや落ち着いた状況で余計な柵を消してキリンのありのままの姿を見せようとするものなのか、必ずしも判然とはしない。

当図案についての説明は、そう多くはない。

「東京市とカルピス会社の募集で名のついた上野動物園のキリン　長太郎君　タカ子さん」

とのみ書かれている。



図1　『時事新報』昭和8年10月9日夕刊1面



図2　『時事新報』昭和8年10月9日夕刊2面コラム

カルピス会社がどのような経緯でこの命名事業に加わったのかは不明だが、合わせてカルピスの商品の図と「カルピス飲んで すくすくのびよ キリンのやうに」という広告が掲載されており、広報効果は十分果たされているものと思われる。

また「ムセンデンワ」というコラムが2面に掲載されている（図2）。そこでは「キリンで赤字解消」と題し、次の通り報じられた。

> 「上野動物園の「赤字」続きは久しい間からのこと、そこで何んとかしてこの苦境から脱し度いと、珍獣奇鳥で坊ちやん、お嬢さん達の歓心を買ふことに努めて居たが、如何に苦心してもその効なく「赤字」は続く一方だった、処が例のキリン夫婦―長太郎とたか子さん(1)が御輿入れになつてからは坊ちやん、お嬢さんの顔も園内に大分殖えて来たので、収入の方も少しはよからうと、この程調べて見たら何んと「赤字」解消、久方振りの黒字景気に福の神様の御入来と、この処長太郎、たか子様々である」

『上野動物園百年史』で収支を確認すると、昭和8年度前後の総収入、総支出額は不明なものの、入園料収入では昭和7年度が194,874円に対し8年度が235,785円と、4万円以上の増収である。キリンの購入費が25,000円なので、この数字だけでは不確実ながら、記事にあるようなキリン効果、つまり「赤字解消」の一端が窺える。また、昭和7年度の入園者数144万人という記録も「翌8年のキリン来園によって、打ち破られてしまった」とあり（ちなみに8年度は179万人）、さらに4頭のキリンの写真に「戦中、戦後を通しての最大の人気動物はキリン一家であった」との説明が付されていて、『時事新報』の記事も頷けるというものなのである。

註

(1)　1面は「タカ子さん」、2面は「たか子さん」と、カタカナ、ひらがなの別はあるものの、当然同じキリンを指す。なお、正式には「高子（さん）」である。

（山本哲也　國學院大學）

2026年度全日本博物館学会特別賞の授与について

2026 年度全日本博物館学会賞・奨励賞及び特別賞授与式は、2026 年 7 月 4 日開催の第 52 回総会において挙行しましたが（詳細は学会ニュース前号で紹介していますので、そちらをご覧ください）、諸般のご都合によりご欠席された小森真樹正会員へ改めて授与式を開催しました。授与式は翌月 26 日に國學院大學渋谷キャンパスにおいて挙行し、半田昌之会長より小森会員へ全日本博物館学会特別賞が授与されました。

小森会員はご著書『歴史修正ミュージアム』（太田出版・2025 年）のご業績により、博物館活動の役割又は博物館学の意義を広く社会に伝えることに貢献をするものとして特別賞授与の運びとなりました。



授賞された小森氏（樋口清之本会名誉会長の銅像前で）

【会告】全日本博物館学会選挙管理委員の公募について

2027 年度・2028 年度・2029 年度 第 32 期全日本博物館学会会長および委員選挙の期間となりましたので、「全日本博物館学会会長・委員の選挙および監事の選任に関する細則」（以下「細則」）に定めるところにより、正会員（個人）の方から当該選挙をご担当いただく選挙管理委員を 5 名募集します。選挙管理委員をお引き受けいただける正会員におかれましては、学会ウェブサイトのお知らせ「全日本博物館学会選挙管理委員の公募について」に掲載の「選挙管理委員応募届（Word 版）」にご記入の上、電子メールにて事務局宛にご提出くださいますようお願い申し上げます。その際、件名を「選挙管理委員応募」としてください。応募締切は、2026 年 11 月 20 日（金）正午必着とします。

なお、応募者が 6 名以上あった場合は委員会において選考いたします。応募者が 5 名に満たなかった場合は、応募者以外は会長が委嘱する正会員に就任を依頼する予定です。

【委嘱期間】
2026年12月（委嘱時）～2027年7月（2027年度第54回総会時）

【委嘱内容】
細則第 4 条の定めるところによる、全日本博物館学会選挙管理委員会の業務

【留意事項】
選挙管理委員は、細則第 5 条の 2 の定めるところにより被選挙権（会長又は委員への立候補権）がありませんのでご留意ください。また、現職の会長・委員及び監事は、細則第 3 条の 5 の定めるところにより選挙管理委員を兼務することができませんので、ご留意ください。

【会　議】
選挙管理委員会は任期中最少で4回程度、本会の所在地である國學院大學渋谷キャンパス（東京都渋谷区東4-10-28）において対面開催をいたしますので、全日程でのご出席をお願いいたします。

第1回（2026年12月頃）
顔合せ、選挙管理委員会委員長の互選、選挙日程・方法の決定、選挙人・被選挙人名簿の作成、立候補・推薦の募集案内の作成及び発送

第2回（2027年1月下旬頃）
立候補・推薦の受付、被推薦者の意思確認

第3回（2027年2月初旬頃）
選挙公報の作成、投票用紙の発送

第4回（2027年3月中旬頃）
投票の受付、開票、当選者の確定

【報　酬】
選挙管理委員には、任期全体に対して20,000円（交通費込）の報酬をお支払いいたします。

【応募届出先】
全日本博物館学会事務局（jimu(a)museology.jp　(a)をアットマークにしてお送りください〕）
※本件は会長及び委員の候補者の募集ではありません（候補者の募集は2027年1月頃に行う予定です）。

委員会議事抄録

【2026年度　第2回定例委員会】

2026年10月20日：オンライン（ZOOM）
出席者：半田、芦谷、粕谷、菅野、栗原、佐藤、島、
　　下湯、高田、並木、持田、山本
委任欠席：内川、金山、髙橋
議　事（議長：半田会長）
(1) 全日本博物館学会運営規程第９条の審議事項
　2年以上にわたる会費滞納につき、指定の期日までに未納の会費を納入せず、及び進退の意思表示を行わなかった会員は、全日本博物館学会運営規程第9条の定めるところにより退会させることとした。
(2) 全日本博物館学会選挙管理委員の公募に関する件
　2027年度・2028年度・2029年度 第32期全日本博物館学会会長・委員の選挙にあたり、全日本博物館学会会長・委員および監事の選任に関する細則の定めるところにより選挙管理委員を公募することとした。公募時期は2026年11月20日までと決定した。
(3) 総会及び大会事項
　今年度第52回研究大会のアンケートについて報告があり、研究大会の運営について審議した。
(4) 次年度総会及び大会事項
　次年度第54回総会・第53回研究大会の開催について、開催日程及び場所について審議した。
(5) 研究会事項
　第1回研究会（11月8日予定）及び第2回研究会（11月22日予定）の支出金額について審議、決定した。
(5) その他
　正会員の入退会について報告、2026年度の業務等について共有があった。

会員情報

入会者（正会員5名・2026年10月時点）

稲垣玲弥	GAN JUNJIE	茅根喜久
中村千穂	室井康平	

退会者（正会員14名・2026年10月現在）

板倉　輝	大澤康太郎	岡田　裕
奥野花代子	木村考勇	佐藤真実子
白澤恵一	石　雨鑫	石　正萌
富澤由規子	長畑　実	中山智貴
日高昭子	福田一葉	

会員数（2026年7月現在）

一般会員	487 名
賛助会員	12 団体

お願い　年会費の納入について

2026 年度会費をご納入いただいていない方は、①・②いずれかの口座まで 8,000 円をご入金ください。本学会の円滑な運営に、何卒ご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

①郵便振替　００１７０－４－２６１４４（加入者名：全日本博物館学会）
②三菱ＵＦＪ銀行　池袋支店　普通預金：１３０４２９１（口座名義：全日本博物館学会）